

# 対象とのかかわりから気付きが生まれる生活科

## ～気付きを深めるための伝え合いの工夫を通して～

田中 千映

子どもたちが主体的に活動・体験し、気付きが深まる生活科の学習を展開したい。何度も対象と関わることで新しい気付きが生まれる。本校の子どもたちにとってバスは、身近なものである。そのバスに何度も関わり、調べていくことで、バスやバスに携わる人々に愛着をもち、日々の乗り方やバスへの思いが変わるのではないかと考えた。子どもたちが「調べてみたい」と意欲をもち探究を続けることができる学習展開、また、その中で子どもの気付きを深めるための支援等を探りながら、対象とのかかわりから気付きが生まれる生活科の学習に迫ることを目指した。

キーワード： 気付き、伝え合いの工夫、活動・体験、対象とのかかわり、バス、

### 1. 研究目的

学校提案「学びをデザインする子どもたち～課題意識の深化を通して～」を受けて、生活科では、「主体的に活動・体験し、気付きの質を高める生活科」を研究テーマにし、子どもの思いや願いにそった活動・体験をすすめること、そこから生まれた気付きを意味づけたり、関連付けたりしながら深化させていくことを研究の柱にしている。

生活科の究極的な目標は、自立への基礎を養うことである。そのためにも、子どもたちは、与えられた課題や活動・体験をするのではなく、子どもたち自らが進んで課題を追究したい、活動・体験してみたいという思いをもち学習に取り組むことができるようにしたいと考える。また、進んでやるからこそ、気付きを深めることができるのではないかと。さらに、低学年児童は、具体的な活動や体験を通して思考する特徴がある。

そこで、子どもたちが進んで課題を追究したり、活動・体験をしたりすることから、自分の生活に結び付けての気付きにつなげ、よりよい生活を創り出していくことができるようにしたい。それには、手立てが大事だと考え、対象に主体的に関わりたいと思える単元の設定、支援の在り方を研究したい。

### 2. 研究方法

#### 「もっと知りたいな ぼくらがつかうバスのこと」

本校では、多くの子どもが、通学時にバスを利用している。バスは、学級の子どもの生活と大きく関わっている。しかし、毎日乗っているからこそ、乗れることが当たり前と感じているように思う。バスやそれに携わる人々（主に運転手）の仕事を繰り返し調べることで、バスに携わる人々の思いや安全に向けての工夫に気付き、バスやそれに携わる人々に親しみをもち、自分たちの日頃のバスの乗り方を意識する子どもの姿が見られるのではないかと。学習指導要領解説に

も、「大切なことは、それらの人々と直接かかわり、親しみをもてるようにすることであり、その気持ちが公共物や公共施設を大切に利用しようとする意識へと高まることである」と書かれている。そこで、Wバスの学習をすることで、気付きが生まれ、自らの生活に生かしていけるのではないかと考えた。

#### 2. 1. 何度も対象に関わる

親しみは、何度も対象に関わり、そのものを「好きになる」ことから生まれてくると考える。単元の前半はバスの設備を中心に、後半ではバスに携わる人々（主に運転手）に目を向けることができるように支援することで、子どもたちの「調べたい」という意欲が高まるのではないだろうか。

#### 2. 2. 子どもの思いを大事にした活動・体験

学びたいという思いは、「見てみたい」「さわってみたい」「作ってみたい」「聞いてみたい」という活動への意欲の高まりから始まる。そのため、子どもたちが「調べたい」と思える対象との出合わせ方を工夫することで、「調べてみたい」と意欲的に活動することができるのではないかと考えた。

また、調べる活動を進める中で、子どもたちから出てきたハテナを大事にする。そのために、調べて気付いたことやハテナをその都度ワークシートに絵や作文などでかけるようにしておく。そうすることで、教師は子どもたちの思いや考えを知り、その後の活動・体験に生かすことができる。また、子どもたちのハテナも学級全体で交流する。

#### 2. 3. 気付きを深める伝え合いの充実

「身の回りの人とのかかわりや自分自身のことについて考えるために、活動や体験したことを振り返り、自分なりに整理したり、そこでの気付き等を他の人たちと伝えあったりする学習を充実する。その際、活動

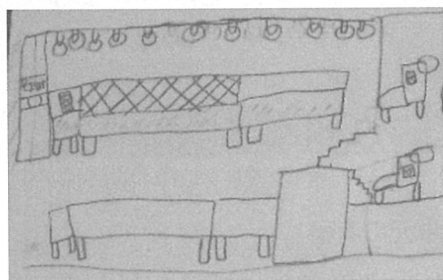
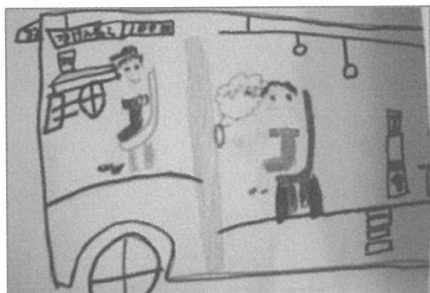
や体験したことを言葉や絵で表す表現活動を一層重視する。」と学習指導要領解説にも示されているように、自分の気づきを全体場で交流することは、自分の気づきを広げたり深めたりすることができる考える。子どもたちが自分の気づきを分かりやすく伝え合うためには、表現方法も大事となってくるであろう。運転手さんの仕事について見つけたことを発表する際には、絵や写真の提示をしたり、実際にやってみたりと、表現活動を工夫させることで、子どもたちの気づきが深まるのではないかと考える。

### 3. 単元の実際

#### 「もっと知りたいな ぼくらがつかうバスのこと」 の実践より

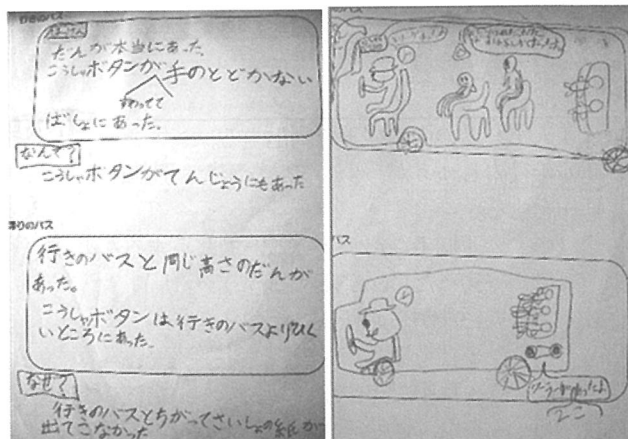
#### 3. 1. 子どもの思いを大事に

本単元は、一人一人が自分のイメージするバスの絵を描き、それぞれの絵を比べるところから始めた。それは、子どもたちから「バスのことを調べたい」と思えるようにしたいと考えたからである。それぞれが描いた絵を比べてみると、座席やつり皮、手すり、運転席、降車ボタン、スロープなど様々な違いが見られた。そこで、みんなで、実際にバスに乗り、バスの中を調べに行くことにした。(バスたんけん1回目)



(図1 イメージするバスの絵)

子どもたちが視点をしばってバスの中のことを観ることができるように、調べに行く前には、バスの中のどの部分を調べてくるかを一人一人がワークシートに書いてからバスに乗るようにした。そうすることで、どの子も視点をもち調べることができた。ワークシートには、見つけたものの他に、ハテナがあれば書くようにした。



(図2 たんけんの時のワークシート)

子どもたちは、見つけたことのほか、ワークシートに書かれていたハテナも全体に出した。みんなで考えられるものは考え、答えがでなかったハテナについては、再びバスに乗り調べに行くことにした。(バスたんけん2回目)

2回目のバスたんけん後は、「座席の優先のシールのところは、おばあさんが座っていたから、お年寄がすわる席だとわかった」「天井にある降車ボタンは大人の人が押していたよ」と、ハテナが解決できたことを嬉しそうに発表する姿が見られた。また、「優先のシールと似ていて、車いすのシールも見つけた」「つり皮の色が優先の席だけ黄色で、あとは茶色になってきたからふしぎに思った」と、新しいハテナも出し、また調べに行きたいという思いをもつことができた。

#### 3. 2. 気づきを深めるための伝え合い

2度のバスたんけん、3度目は営業所に質問に行ったことで、子どもたちはバスの中の様子がだんだんわかってきたようであった。今後は、バスに携わる人々にも目をむけていってほしいと考え、子どもたちに「運転手さんはどんな仕事をしているのだろう」と投げかけた。毎日通学に使っている子も「運転している」「お客さんを乗せる」他には思いつかないようだった。そこで、再びバスに乗り、運転手さんの仕事を調べることにした。

見つけた仕事をみんなにわかりやすく伝え合うことができるように、子どもたちには、絵や写真、動作で表すなどの方法があることを知らせ、各自準備を進めさせた。様子を絵に表す子もいれば、運転手さんのマイクや帽子、料金箱を作る子、写真の必要な部分に○を付ける子など、それぞれ自分が一番伝えたい方法を選び、準備を進めることができた。準備が進んでくると、「早く発表したいな」「〇〇君がマイクを作っている、どんな発表をするのかな」と伝え合いの時間を楽しみにしている様子が見られた。

そして、「Wバスの運転手さんはどんなお仕事をしているのだろう」と、調べてわかったことを発表し合っ

た。

#### 授業記録

<4人がバスの中の様子を劇化する。>

運転手役のしゅうが、少し笑いながら、運転している動作をする。

(C : 運転手さんが笑っていてどうするんよ。)

(C : 笑ったらあかんやろう。)

教師：笑いながら運転してたん？

(C : 首を振る)

(C : 集中できやん。)

教師：みんな、運転手さん笑いながらちがうの？

C : 真剣。

教師：じゃあ、真剣に。

<もう一度、やり直す>

しゅう：お客さんの迷惑なので静かにしてください。

運転手さんがマイクで話していることの発表が続いたので、運転手さんはどのようにマイクで話しているのかを劇化することにした。みんなの前で運転手役をするしゅうは、少し照れ気味で、笑いながら運転する様子を見せた。それを見ていた子どもたちは、「運転手さんが笑ってどうすんのよ」「笑ったらあかんやろう」と言った。動作に表すことで、運転手さんが、笑わず真剣に運転していることにも目を向けることができた場面であった。

こ こ：<絵を前に映す。>

わたしは、運転手さんがアナウンスで色々言ってくれているのに、運転手さんがまた同じことを言ってくれているのを見つけました。

教師：わかった？

(C : うん)

教師：どんな言葉、言ってくれていた？

こ こ：〇〇してくださいねとか。

教師：アナウンスでも言ってくれていたね。

こ こ：だから、わたしは運転手さんが運転しながらやるので大変だなと思いました。

教師：運転手さんはちゃんと運転もしながら、わざわざ言ってくれているんや。こんな仕事をしてくれていたんやね。他には？

ふ ゆ：県庁前から県庁前に行ったことありましたよね。

(C : どういう意味ですか？)

一周ぐるっと周ってきたときです。

(C : あ〜。)

あの時に、0 先生が乗っていて席が満員だったので、運転手さんが「よかったら席を譲ってください」と子どもに言っていました。

(C : 同じです。)

それを劇にしたい。

<劇化する>

ふ ゆ：よかったら席を譲ってあげてください。

教師：そんなに後ろ見て言ってくれていたん？

(C : ミラー見て言っていた)

り か：ふゆくんに似ていて、なんか「座らせてあげてください」って言う時に、運転手さんの前にあるかがみで見て言っていたと思います。うつしていい？(写真を前に映す) ちょっと見えにくいと思うけど、ここにある鏡で運転手さんが見て、「座らせてあげてください」って言ったんだと思います。

ふゆは、気分にもうがあり、素直に学習に取り組むことができないこともある。ふゆは、発表の準備の段階でマイクやエンジンギアを作ることには意欲的であった。そんなふゆを全体の中で生かしたいと考えていたので、ふゆが劇にしたいと言ったので、劇化することにした。



(図3 作ったマイクや帽子を使って劇化する)



(図4 写真を使って具体的に説明する)

#### 4. 単元の考察

子どもたちの「調べてみたい」という思いからWバスに関わりをもったことで、バスの中の様子を調べる活動を、子どもたちは主体的にスタートさせることができた。また、子どもたちの中から出てきたハテナを大事にし、2回目のバスたんけん、3度目は営業所に質問に行ったことで、子どもたちの調べる楽しさは増していったと考える。ハテナの答えが見つけれられたときは、得意そうに発表したり、教え合ったりしている姿が見られ、自分たちで調べたいと思うことを見つけ、それに向かって追究する活動の楽しさを味わうことができたように思う。

授業記録からも、見つけたことを劇化にし伝えることは、周りの子どもたちが興味をもって友達の発表を聞くことができたり、子どもたちが気付きを深めたりするのに効果的であったと考えられる。しゅうが、はじめは照れながら運転手役をしようとした時、見ている子どもたちが、「運転手さん笑ってどうするんのよ」「笑ったらあかんやろう」と言っている。教師も、「笑いながら運転してたん？」と子どもたちに問い返すと、子どもたちから、「ちがう」「集中でできやんやろ」と返ってきた。運転手さんが、いつも集中して運転していることを、子どもたちは再確認することができた。また、ふゆが運転手役をし、お年寄りが乗ってきたところを劇化した場面でも、運転手さんは後ろを見ながら運転するのではなく、ミラーを見ながらマイクで話していることに気付きを深めることができた。さらに、りかが、ふゆに続いて、運転手さんがミラーを見ながら運転している写真を見せながら説明したことで、運転手さんがミラーを見ていることが、より詳しくみんなに伝えることができ、効果的であったと考える。

運転手さんの仕事を発表するに至るまでには、子どもたちはバスに少なくとも4回は乗っている。日頃通学に使っていない子どもたちも、単元のはじめは、みんなの話していることが分からないといった表情をみせていたが、バスに乗りに行く度に、発見したことやハテナも進んで発表できた。また、バスの中にはどんなものがあったかを確かめに行くことからスタートしたが、何度もバスに関わりハテナを出し調べる活動を繰り返すことで、高い位置につけられている降車ボタンの理由、優先座席が違う色をしていることとその理由など、バスの設備の工夫や運転手さんの思い等に迫ることもつながっていった。

## 5. 成果と課題

Tさんのおかげで「優先席はなぜ色がちがうのか」とか、「バス停の時間といっしょにするためにはどうするのか」とか教えていただきありがとうございます。乗り方のことでは、一つでもいすが空いているとすわらないといけないとか、今ではわからない子には教えてあげています。これからは、バスの中で大きい声でしゃべらないとか、お年よりの人が来たらせきをゆずることにします。思ったことは、バスの中は、いろいろなものがあって、はじめてのつたときにびっくりしました。

Tさんに聞いてバスのいろいろなことがわかりました。たとえば、運転手さんがボタンをおすとドアが開いたりしまったりとか、おきゃくさんが降車ボタンをまちがえておしてしまったとき、リセットボタンでけしてくれることです。ぼくは、バスをつかって学校に行っていないけど、もし、バスにのつたときにそのバスのルールをまもりたいです。

Tさんに教えてもらってわかったことは、バスの絵のところがシールでできているのがわかってうれしかったです。そして、べんきょうしてわかったことは、つりかわのことです。なぜかという、優先せきのところだけ真っ黄色にしているのがべんきょうできました。のり方のことは、さいしよは、あまりお年よりにせきをゆずれなくて、ゆう先せきのことを知ってせきをすくゆずるようになりました。Tさん教えてくれてありがとうございました。これからもバスのマナーをきっちりやりたいと思います。

上記の文は、単元の最後に、営業所に質問に行った時にお世話になったWバスのTさんに書いたお礼の手紙である。子どもたちが、バスそのものや運転手さん、バス会社のTさんに関わり、いつも利用するバスに新たな気付きがあった喜び、また、新たなことを知って、バスの乗り方を見直してみようと自分なりに思った子どもたちの姿が読み取れる。そのことから、今回の実践では、対象（バス・運転手、携わる人々）に何度も関わり、見つけたことを伝え合うことで、子どもたちには、新たな課題や具体的な気付きが生まれ、自分たちの生活に生かしていこうとする姿が見られるようになったといえるであろう。しかし、支援の具体的な在り方等においては、他にも方法が考えられる。今後の課題としたい。

## 参考文献

文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説 生活編」